

## 久し振りに春季研究発表会の担当校を仰せつかって思うこと (S. Sambe) [J]

まあ、面倒くさい、大変だ、本務ではない、赤字になつたらどうするんだ、等々、「やらない、やれない、やりたくない」理由だけを並べ立てる負の想像力豊かな人は、あいにくどこの組織にもいるものだ。しかし、それでは何も動かない。だから、「やれば、やれるし、やってやろう」と思う、正の想像力を持つ同志を集めることから始まるのが、こうしたイベント準備の常道である。

前回、慶應義塾大学で2010年の春季研究発表会を開催するということで、その準備を仰せつかった時、筆者自身はちょうど学会の企画担当理事の立場であった。だから立場上、自分が所属する慶應義塾大学日吉ドイツ語部会に頭を下げに行った。その際「お前が勝手にやれば良いではないか」と信じられない言葉を浴びたこともあって仰天したのだが、そうした時、会議後に「三瓶さん、2人でやれば良いよ」と言ってくれたのが、畏友の故 鈴村直樹君だった。彼が慶應側の代表になってくれ、筆者が学会側の代表に立ち、この2人の密接な連絡で、何の問題もなく春季研究発表会は開催され、成功裡に終わったのである。だから、研究発表会を開催するには2人もいれば十分可能なのだと見える。実際に、東京以外の開催では、そのようにごく少数精銳で尽力して下さる方々もおられ、本当に頭が下がる思いだ。しかし、自らが所属する担当校の内情を筆者も知るとはいえ、担当校側の鈴村君の八面六臂の活躍があったからこそ、問題なく実現できたことは疑いの余地もない。かつてのように、誰もが一目置く（嫌でも置かざるを得ない）ボス的長老がいて、その鶴の一声ではじめて何かが動く、という時代ではもはやない以上、全体を見渡すことができる人が、自分の労力を抛出して、利他的に動かざるを得ない時代になってしまったのだ。

それから14年を経た今年、2024年6月8日（土）／9日（日）の春季研究発表会について、再び慶應義塾大学が担当校を担う番になった。メンバーも大きく入れ替わっていて、前回、あるいはそれ以前の状況を知る人も少ない。しかし、時代は大きく良い方に動いていた。理事経験者でもあった田中慎さんの献身的な尽力があり、斎藤太郎さんが名誉教授の立場でありながら大学側との交渉を率先して引き受けて下さったほか、佐藤恵さんをはじめとする、女性の割合も増えた若い同僚たちがお互いに助け合って、イベントとしての研究発表会の運営を楽しんでいたように思う。

自分の研究を発表して、他の人たちと議論をし、懇親会で人的な繋がりを深め、研究や教育の進展に繋がる、それこそが、春季、秋季の研究発表会＋懇親会の最大の存在意義であろう。若き同僚たちは、自分が研究発表をして、それを話題に他者と交わることが大切だと知っているからこそ、そのための場を設けるために自ら力を尽くしてくれたのであろう。

コロナ禍を経て、春季学会で久し振りに開催された懇親会で、筆者は山本賀代さんとともに司会の一翼を担つたが、あえて特に余興などの時間を設けなかった。しかし、それが退屈であったという感想は、一切聞かれなかつた。当日の会場では、久し振りの交歓にあちこちで花が咲き、自由な歓談の場が学会活動にとっていかに大事であるかを、再確認したのだつ

た。

かつて独文学会理事会では、応募してきた研究発表を認めるか認めないか、長時間の無駄な議論が行われていた。たまたま応募内容に専門分野が近い人が理事会にいれば、そういう人が熱く語ってしまうことで、激論になる。逆に、そうした専門に近い人がいなければ、さほど議論の対象にならない。だが、これは明らかに不公平だった。もちろん機関誌に載せるか載せないかのレベルになれば、内容に関してきちんと論じて採否を決める必要があるわけだが、口頭研究発表への採用は形式要件を満たしていれば良いのではないか、ということで、当時、企画担当理事であった筆者が提案した、要件充足を客観的に判定するための書式が基になって、（その後、さらに変更があったようだが）現行の応募方式が定着した。

だからこそ、その審査を通過した発表は、口頭発表であれ、ポスター発表であれ、ブース発表であれ、シンポジウムであれ、それぞれの形式を最大限に活用して、全体として賑やかな研究発表会となってくれれば良いのだ。内容に異論があったら、会場でライブの激烈な議論をすれば良い。時間が足りなければ、懇親会で、近所の居酒屋で、第2ラウンド、第3ラウンドをやれば良い。それこそが研究発表会に人が集まることの意義であろう。それによって発表者は、機関誌に投稿するまでに、自分の原稿を練りに練ることができる。そうなることを期待して、発表方式を多様化し、審査方式を公平化したのだった。現在の理事会もそのように運営されていることを願う。

また、春季・秋季の研究発表会そのものが専門家向けに内向的、閉鎖的になるのではなく、ドイツ語・ドイツ文化に対する一般の関心を覚醒すべく、啓蒙活動の一環としても利用することを、筆者が広報担当理事だった時に提案した。誰に対しても門戸を開くために、参加の可能性を広げ、学会員以外にも参加してもらえるようにしたし、可能ならば Goethe-Institut などと協働して、ドイツ映画の無料上映会や展覧会などの催しを同時開催することも提案した。実際に、何回かはこうした催しも同時に行われ、外部の関心に応えた。最近はどうであろう。またまた閉鎖的になっていないだろうか。今年の慶應学会では、関口存男関連の展示などは行ったものの、一般に対するアピールまでは手が回らなかった。これは大変に大きな反省点だ。

私たちの研究・教育活動が、何の問題もなく一般社会から十分な理解を得られ、応援してもらえるなら、またドイツ語・ドイツ文化の普及・啓蒙を支援してもらえるなら、素晴らしいことだろう。黙っていてもそれが可能ならば、何の問題もない。しかし現実はそうではないのである。いまやドイツ語・ドイツ文化に対する理解は決して当たり前ではない。だからこそ、春季・秋季の研究発表会を、私たちの研究・教育活動のみならず、ドイツ語・ドイツ文化を知ってもらうために、千載一遇のチャンスとして活用しない手はないのだ。過去には、研究発表会を、地元新聞にとり上げてもらうよう広報をし、その新聞記事を見て関心を持つ人々が足を運んでくれたこともあった。こうした活動により、少しでも私たちの研究・教育活動が社会に知られ、そしてそれによって関心を持つ次の世代が育ってくれたら、どんなに良いだろう。

もしも、ドイツ語・ドイツ語文化の専門家集団である日本独文学会が、その関心領域の裾野を広げる努力をせず、閉鎖性を強める方向に進むのであれば、早晚、立ちゆかなくなることは自明である。特に首都圏以外の地域で行われる学会を、こうした広報活動にとってもまたとない機会であると捉え、そのチャンスを最大限に利用して頂ければと思うのである。今回の慶應学会で、そのことを実現できなかつた大いなる反省とともに、今後に遺したいと思う。

三瓶 慎一（慶應義塾大学）

0202

作成日：2024/10/07